

<書評論文>

宗教と日常生活

Stephen Hunt,⁽¹⁾
Religion and Everyday Life
 (Routledge, 2005)

千 藤 萌

1 はじめに

本書は19世紀以降のアメリカおよびヨーロッパにおける社会生活と宗教の関係とその変容について考察する著作である。キリスト教が議論の主軸となるが、現代の宗教に重要な影響を与えるものとして1960年代の「新宗教運動 (New Religious Movements)」やそれに由来するとされる「ニューエイジ (the New Age)」⁽²⁾も扱われている。現代における宗教の諸相と宗教社会学の理論の概説書として、初学者向けの著作であるとの印象が強い。しかしポスト近代における社会変動が宗教組織や信仰に与えた影響を重視した議論が進められるため、「世俗化 (secularization)」や宗教回帰など複雑な様相を呈している宗教社会学の理論を整理しやすいという点での意義は大きいだろう。

本稿ではこの著作の内容の要約を主としながら、ポストモダンにおける具体的な社会変動とそれらが与えた宗教に対する影響について整理し考察を行うものとする。

⁽¹⁾ the University of West of England reader

⁽²⁾ 日本では、「精神世界」の呼称が用いられている。宗教学者の島薮進は、「ニューエイジ」「精神世界」いずれの語も使用される地域が限られており、また元の語源とも異なっていることから包括的な学術用語が必要であるとし、「新霊性運動・文化 (new spirituality movements and culture)」の語を提唱した (島薮 1996)。

2 本書について

2-1 本書の目的・特徴

本書は宗教における習慣と信仰の調査を通じて、社会生活と宗教との歴史的および現代的な関係を探索することを目的とした著作である。アメリカとヨーロッパにおけるキリスト教が議論の中心であり、宗教生活における現代の変容が、社会化・組織への所属・信仰と習慣にライフコースを通じていかなる変化を与えたのかを問いの中心に据え、また同様に階級・ジェンダー・エスニシティの影響の重要性にも目を向けている。

本書は、冒頭の章で「宗教 (religion)」の定義の変化について言及したのち、ポスト近代の時代的特徴を具体的に検討し、それから宗教のトピックへと話題を進めるという構成になっている。様々な宗教現象を社会変動との関連の中で考察するというのが本書の主軸であると言えよう。宗教社会学の理論が多く引用・要約されていると同時に、統計調査を用いて人々の宗教的生活の具体的側面へのアプローチを試みていることが特徴といえる。

2-2 本書の要約

まず始めに、章単位で本書の構成を概観したい。

上述した通り、最初に「宗教」の定義の変化について様々なアプローチからの言及がなされる (1章)。続いて現代社会の変容に関するトピックに入るが、具体的にはポスト近代の社会変動の観点 (2章) と合理的選択理論から見た宗教の「市場 (marketplace)」という考え方 (3章) が説明される。

4章から7章までは現代社会の変容がアメリカおよびヨーロッパのキリスト教に与えた影響の議論が中心となるが、個々の内容としては日常の宗教という文脈からの分析 (4章)、人口統計的な変数から見た宗教に関する傾向の継続と変化 (5章)、アメリカにおけるチャーチ⁽³⁾やデノミネーション⁽⁴⁾といったキリスト教宗教集団帰属の志向変化 (6章)、キリスト教原理主義 (fundamentalism) (7章) となっている。

残りの2章では現代における新たな宗教の形として、前述の「新宗教運動」の発展と衰退 (8章)、「ニューエイジ」の隆盛とその特徴 (9章) に関して議論が行われる。結論では以上

(3) ニーバーはウェーバーおよびトレルチの宗教集団の類型論の業績を継承する形で、宗教集団への入会原理をもとに、誕生によって強制的に所属する教会 (チャーチ) と自発的に参加するセクトとを区別した (Niebuhr 1929=1984)。

(4) ニーバーはアメリカ社会に見られる諸教会の現状を論じ、それらに共通する特徴としてセクトのデノミネーション化を指摘した (Niebuhr 1929=1984)。この概念はその後 S. ミードらの研究を通じて、宗教集団の現代的類型として定着してきたと言える (井上編 1994)。

の話題の要約を含むと同時に N. J. デメラスの議論を引用して、今後宗教社会学の理論を構築していくうえで「宗教」の定義を再考することの意義を強調している。

以下の項では、これらの内容を「宗教の定義」「ポストモダン社会の特徴」「現代におけるキリスト教の変容」「新たな宗教の形」「宗教の定義再考」の5項目に分けて要約していくものとする。

2-2-1 「宗教の定義」(1章)

宗教社会学に大きな功績を残したマックス・ウェーバーは、世界宗教の社会的起源に関する論考の中で、ある特定の文化が特定の時期や場所において独自の信仰システムを生み出すとき、互いに結び付きのない文化であるにもかかわらずしばしば類似の多神教形態が各地で見られることを示した。彼によって提示された「宗教の定義」の問題について、本書では実証主義、機能主義、現象学・解釈主義のそれぞれの立場からのアプローチが紹介されている。

実証主義的アプローチを試みた文化人類学者の E. タイラーは宗教の原初形態として前産業社会における超自然的な信仰体系、とりわけアニミズムを強調し、文明社会にも同様の傾向が残存していると考えた。しかしこのアプローチは宗教の本質として感情的な側面を強調する一方、宗教の持つ知性的・社会的源泉としての側面を見落としているといった批判もなされた。

こうした実証主義的アプローチに代わって登場したのが機能主義的アプローチであり、代表的な人物としてはデュルケムが挙げられる。彼は宗教とは社会の産物であると考え、社会的・個人的レベルのいずれにも寄与するものとして、信仰体系・共同体・社会的価値の3点に主眼を置いた宗教の定義を行った。このアプローチへの批判としては機能主義に内在的な問題に関わるものがあり、宗教の機能的な面だけが強調され、宗教に対する個人の社会的・心理的な要請を度外視しているという議論がある。

次いで登場した現象学的・解釈主義的アプローチによって、従来の宗教に対する機能主義的視点から当事者が持つ宗教の意味付けや解釈への認識論的視点への移行が行われた。これにより「宗教」はキリスト教に代表されるような従来の伝統的な宗教の形から、前述の「ニューエイジ」や「疑似宗教的なもの (quasi-religions)」へその意味が及ぶ領域を拡大することになった。こうした潮流の中で登場した新たな概念が「スピリチュアリティ (spirituality)」である。これは自己解放や変容などを志向する新たな宗教の形とも考えられ、「ニューエイジ」に関心を寄せる人々の自己規定の在り方とも密接に関わっている。

宗教の定義に関わる以上の議論の考察として筆者が指摘するのは、このような宗教の定

義の拡大が現代の宗教の本質に関する議論の上で大きな問題となっていることである。この指摘は本書の結論部分における考察で重要な示唆となるものである。

2-2-2 「ポスト近代社会の特徴」(2、3章)

ポスト近代社会に見られる特徴として、本書では工業化の進展、都市化、国家・官僚制の成長などが挙げられる。これらに加えてポスト近代の社会変動と宗教変容を考える上で非常に重要なのが、新しい科学技術の発展と消費主義の進展である。

前者に関連して、リオタールはポスト近代に関する著作において、ポスト産業社会とそれに伴うポスト近代社会は多くの重要な技術的および科学的、経済的な変容をもたらしたが、中でも最も重大な変化は「大きな物語 (mega-narrative)」(世界の確実性や人間性の解放、社会の発展を強調するもの)の失墜に起因するとし、こうした変化こそがかつては世界の「真実」を保証していた多くの宗教の表象の衰退を引き起こしたのではないかと推察している。

一方後者に関しては、合理的選択理論の文脈において論が進められる。拡大する消費主義のもとで宗教もその影響を免れえず、「寄せ集めのスピリチュアリティ (mix 'n' match spirituality)」と呼ばれる状況が顕在化した。これは断片化された宗教的神話を再構成した「宗教」が「市場」に流通し、消費者がそれらを自由に選択し購入出来るというものである。P. バーガーは世俗化の商業主義的観点から、宗教の多元主義に裏打ちされたこの状況を、従来の宗教性の形式を衰退させ同時に世俗化を加速させているものとして見た。ポスト近代社会において宗教は誕生と同時に所属するものではなく、市場での競争を余儀なくされる「商品」へと変化した。これは宗教の「供給側」から見れば、それぞれの宗教は「消費者」の要求を満たし、継続的な支援を得ることなしには存続しえないという従来では考えられない新たな局面をもたらしたことにほかならないのである。

2-2-3 「現代におけるキリスト教の変容」(4～7章)

本項は、上述のポスト近代社会の変容がアメリカやヨーロッパにおける宗教に与えた影響の考察が主題となる。

ポスト近代社会における地縁共同体の解体や公的教育における政教分離の進展は宗教が従来担ってきた人々の社会化機能、とりわけ子どもに対する宗教および倫理教育を後退させた。このトピックに関連して言及されているのはブラウンのイギリスにおける日曜学校の研究である。日曜学校は世俗化と社会の分化への教会の危機感を背景に、子どもたちに宗教的な知識を与えるべく多くの教会が主体となって19世紀に開始した運動である。ブ

ラウンの調査によると、1911年にはイングランド・ウェールズにおいて半数以上の子どもがこの学校に参加していたが、1960年以降は著しい減少が見られた。彼は日曜学校運動の衰退と現代のイギリス若年層における犯罪率およびドラッグ・アルコール中毒者の増加との関連を指摘し、宗教の持っていた社会化機能の衰退が倫理教育の欠如として現れたとみている。

また、教会への家族礼拝も同様に減少しているが、これは人々のライフスタイルの多様化によって教会が従来規範としてきた家族観が最早現代の状況にそぐわないものとなったことを示唆している。また宗教の「選択」という観点からは、従来の共同体的な地域主義の宗教から、アイデンティティと密接な関係を持つ主体的参加型の宗教へと志向が移行していることも示唆されている。

人口統計的な観点の特徴としては、年齢カテゴリによる宗教帰属の一般化の難しさが挙げられる。一般的に、若年層よりも高齢者層の方が宗教に対する意識が高いが、これは家族との死別や自らの人生の終末への意識を契機として「死後の世界」の思考が深まるのに加え、会社の退職によって公的領域を追われた高齢者がアイデンティティの拠り所として私的領域に基盤を置く傾向があり、そのひとつとして宗教が選ばれていることも考えられる。

また W. ルーフの「ベビーブーマー」⁽⁵⁾の宗教帰属研究によると、この世代は青年期にカウンターカルチャーの担い手であったにもかかわらず、中高年期に差しかかるとキリスト教教会への所属を志向するようになる。しかしこの世代にとって重要なのは宗教の「消費」における選択の多様性であり、同様の傾向が彼らの後続の世代に関しても言える。更に個人主義の影響から、家族内でも子どもが親の志向する宗教や宗派を必ずしも引き継ぐとは限らず、家族の構成員がそれぞれ自分自身の宗教を選択する傾向があるという。これは「供給」が上手くいかなかったチャーチやデノミネーションにとっては信者の世代継承が難しくなっており、信者人口の減少の一因になっているという見解に繋がるものでもある。

こうしたポスト近代社会に見られる宗教の衰退の傾向に関して、アメリカでは1970年代に公的領域における宗教の復興が起こった。彼らは「福音派 (Evangelicals)」と自らを名乗り、公教育における宗教問題や中絶の合法化といったセクシュアリティに関する問題を契機としてアメリカ社会に現れ、政治化の色を強めていった。現在彼らは「原理主義

(5) アメリカにおいて、1945年から1960年代にかけて出生した世代を指す。

者」⁽⁶⁾と呼ばれることが多いが、これは伝統的なアイデンティティや社会的組織の世界的な解体に直面した際の「抵抗するアイデンティティ」の構築の手段として見る事が出来るとされる。またグローバリゼーションと同時に進行する「グローカリゼーション (glocalization)」の文脈から見ると、移民宗教が民族性やアイデンティティの保持の基盤としてエスニシティに深く関連していることも指摘されている。こうした動きはポスト近代に影響を受けた宗教の衰退現象とは逆行するものだが、宗教の「市場」において、今なお伝統的かつ統合的な社会の一員である個人が存在していることは重要である。

2-2-4 新たな宗教の形 (8、9 章)

この項では「新宗教運動」および「ニューエイジ」に関しての言及が行われる。前者は 1960 年代にアメリカで起こったカウンターカルチャーの一派であるが、加入者減少によるキリスト教の衰退期に現れたものであり、多くがヒンドゥー教や仏教などの東洋思想の要素を持っていた。これらは「現世拒否 (world-rejecting)」と「現世肯定 (world-affirming)」の二極的な傾向間の座標軸において、それぞれの性格を把握することが出来るとされる。ブルースによると、前者の性格が強い新宗教は信者の参加に対しより多くの時間やエネルギーを要求し、人間的な自己に対して極めて低い価値付けを行うのに対し、後者の性格が強い新宗教は個人をそれほど非難されるべき存在としては見ていなかった。これらの「新宗教運動」は後に衰退の過程を辿るが、その神秘的あるいはオカルト的な要素は 1970 年代以降の「ニューエイジ」に引き継がれることになった。

ニューエイジは、固定化された教義や組織を持たず、個人単位の自己変容や自己解放を志向することが挙げられる。そのための手段として本や雑誌、オーディオ機器などのメディアが用いられ、実際の「体験」では瞑想や呼吸法が採用されることが多い。しかし必ずしも特定の場に集まらなければ行えないものではなく、個人のライフスタイルに合わせて日常生活の中で実践できるものである。また商業主義や消費主義と適合的である点や、東洋的な全体主義的世界観を持つものが多い点も特徴的であるとされている。

2-2-5 宗教の定義再考 (結論)

これまでポスト近代社会の特徴を念頭においた現代アメリカおよびヨーロッパ世界に

⁽⁶⁾ 藤本龍児によると、原理主義の思想やそれに基づく世界観は、1910 年代から 1920 年代にかけてアメリカで生じた第一期原理主義に端を発しており、これは聖書の記述に誤りはないとする「聖書無謬説」の主張から、公教育における進化論教育への反対を主軸として起こったとされる (藤本 2009)。そのため本稿の福音派の主張とは区別して認識するべきであろう。

における宗教の変容について見てきたが、結論部分ではこれらの要約が行われるとともに、改めて「宗教の定義」に対する筆者の見解が提示されることになる。ここで筆者は N.J. デメラスの議論を展開するが、それは「宗教を“実質的に”、定義し、聖なるもの (the sacred) を“機能的に”、定義する」という主張である。

要約の最後としてこの点に関して言及したい。例えば教会への所属や礼拝参加という形で観察できる「宗教」を、宗教の実質的な要素として認識し、一方で従来の宗教形態に縛られない新しい宗教現象には「聖なるもの」という名前を与え、宗教の機能的な要素として認識するとする。そうすることで、現代における教会礼拝への参加率の低下といった現象を「宗教の衰退」として指摘し、ニューエイジに由来する新しい宗教現象を「聖なるものの隆盛」として主張することが出来るのである。従来は伝統的な教会礼拝も、新しい宗教現象も全てを包括して「宗教」という語で表わしていたことが、世俗化の議論に混乱をもたらす一因であったが、上述の定義を用いることでこの議論を整理することが可能であるとする。また筆者は従来の宗教の定義の問題点として、「聖なるもの」の調査を狭量化する傾向があったこと、また仮に宗教が宗教的ではない代替物に取って代わられた時、短期的な世俗化が起っていると主張してしまうことを挙げている。こうした宗教の再定義によって、二者の概念の拡大に端を発する宗教社会学の積年の緊張状態が解決されるという N. J. デメラスの主張に筆者は肯定的な見解を示している。

3 考察

冒頭でも述べたように、本書の特徴はあらかじめポスト近代社会の変化の議論を宗教の議論に先んじて組み込んでいることである。宗教社会学の初学者向けの従来の著作では、数多くの宗教社会学上の理論を時系列順で紹介するもの、或いはテーマ毎の区分で話題を提供するものが多く見られるが、これらの著作は宗教社会学の理論やトピックを縦断的・横断的に知ることが出来る一方で、それらがどのような社会状況や現象・運動の下で生成され提起されてきたのかについては把握しにくいという難点があった。この点に関して、本書はポスト近代社会の議論と宗教の変容の議論を有機的に結び付けた考察を可能とするものであり、改めて評価しておきたい。

本書において、著者の Stephen Hunt は自身の理論的立場を明確に示してはいないが、1章の宗教社会学の理論解説では実証主義的アプローチについて、宗教の現代的変容と他の生活領域におけるその衰退を説明可能なものとして評価している。また、この方法は西洋社会において宗教の衰退を支持する立場の研究者に長く採用されてきたとしながらも、

本書で紹介された機能主義的アプローチ、現象学的アプローチも宗教の定義を考えるうえで重要だとし、実証主義、機能主義、現象学的アプローチの三者の統合形態についても言及している。この点で著者は実証主義的アプローチを支持する立場であると考えられるが、現代における宗教の変容を考えるうえで、従来の理論をそのまま採用するということには問題があるという立場でもある。同様のことが結論部分のニーバーの議論でもうかがえる。

一方で本書の課題点を挙げるとすれば、キリスト教の議論を主とするにもかかわらず、アメリカにおけるチャーチ・セクト・カルト・デノミネーションの類型化の議論に関しての言及はあまり深められないまま、合理的選択理論の文脈における宗教の「消費」の議論へと論を進めてしまっていることがあるだろう。宗教社会学の理論において宗教集団の類型化には蓄積があり、特にデノミネーションが他の類型と比較した際に見られる特徴については、アメリカにおけるキリスト教の発展を論じる上で重要な着眼点となりうる。本書が初学者向けという性格を持つことを考慮しても、宗教の定義に多く紙幅を割いているのと同様、こうした基礎的な理論に関しても丁寧な説明がされているとその後の議論がより理解しやすくなるだろう。

4 おわりに

本書はアメリカおよびヨーロッパにおけるキリスト教の変容を主として扱うものであった。一方世界にはキリスト教に限らず多くの宗教が存在しており、それぞれ独自性を持っている。またそれらを信仰する民族の社会的および経済的な状況は異なるが、ポスト近代社会の社会的変化の特徴は世界の多くの地域で類似した傾向を持つだろう。本書の議論は、様々な地域における宗教の現代的変容の考察のひとつの足掛かりとなりうるのではないだろうか。

参考文献

- Niebuhr, H. R., 1929, *The Social Sources of Denominationalism*. (= 1984, 柴田史子訳『アメリカ型キリスト教の社会的起源』ヨルダン社.)
 井上順孝編, 1994, 『現代日本の宗教社会学』, 世界思想社.
 島蘭進, 1996, 『精神世界のゆくえ——現代世界と新霊性運動』, 東京堂出版.
 藤本龍児, 2009, 『アメリカの公共宗教——多元社会における精神性』, NTT 出版株式会社.

(せんどう もえ・修士課程)